初めの愛――エペソにある教会

黙示録２・１～７

エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」』

迫害を受けてパトモス島に流刑となっていた使徒ヨハネに、キリストは、アジアの七つの教会へのメッセージを託しました。その七つの教会というのは、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤにある教会のことで、パトモス島から見ると、これらの街は時計回りに円を描くようにして並んでいます。当時、使徒たちが書いたものは、教会から教会へと回覧されましたので、エペソからラオデキヤという順序は、おそらく、「黙示録」が回覧された順序ではないかと思われます。

この「七つの教会」へのメッセージには共通したパターンがあります。最初に、メッセージの与え主

である「キリストの姿」が描かれます。それから「叱責」のことばと「勧告」が語られます。次に「称賛」のことばと「約束」のことば」が語られ、最後に「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」ということばで締めくくられます。きょうはここに描かれている「キリストの姿」を中心にこの箇所を学んでみましょう。

一、栄光の主

黙示録は、イエス・キリストを「栄光の主」として描いています。黙示録1・13～16にはイエスの栄光のお姿が、次のように表現されています。

それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

これらはすべて、象徴の言葉です。イエスの栄光は、人間の言葉を越えたもので、象徴の言葉を使ってでなければ、表現できないからです。しかし、黙示録で使われている象徴の言葉はすべて聖書から取られており、その意味を特定するのはそんなに難しくはありません。また、黙示録自体がその意味を教えているものも多くあります。たとえば「燭台」が「教会」を表わし、「星」が「教会の御使い」、つまり、教会の指導者を表わすことなどです（黙示録1・20）。

このメッセージは、初代教会の礼拝で語られていた説教を反映していると思われます。初代教会では、礼拝で語られる説教は、単なる聖書の講義で

も、人生の訓話でもありませんでした。それは、説教者を通して取りつがれるキリストご自身からのメッセージでした。そして、説教の第一の目的は聞く人にキリストの栄光を示すことでした。教会の礼拝は、何よりもキリストの栄光が示され、それがあがめられるところだったのです。

エペソ教会へのメッセージでは、キリストは「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方」（1節）として描かれています。「右手」というのは「力」や「権威」を、また、神がその力や権威によって頼る者を守り、支えてくださる「保護」を表わします。「星」は教会の指導者ですから、キリストが七つの星をその右手に持っておられるのは、キリストご自身が教会の指導者たちを保護しておられることを意味します。教会は、キリストの栄光を人々に表わすので、「燭台」と呼ばれています。その燭台が「金の」燭台と言われているのは、教会が、キリストの血によってあがなわれた、かけがえのないもの、神の目に尊ばれていることを表わしています。キリストが「燭台の間を歩」かれるというのは、キリストが絶えず教会と共におられることを意味しています。

初代教会の指導者たちは、外からの迫害と教会内部の分派の両方から絶えず攻撃を受けていました。教会を滅ぼそうとする勢力は、当時「監督」と呼ばれた使徒たちの後継者に攻撃を加えました。指導者を倒してしまえば、教会も倒れると考えたのです。しかし、教会は、礼拝のたびごとに、栄光のキリストを見上げ、ひたすらにキリストに頼りました。キリストは教会を支え、その指導者を守ってください

ました。多くの監督が殉教しましたが、教会はついに分派を退け、迫害を克服したのです。

内に外に大きな問題をかかえ、嵐にもまれてきた教会が勝利を得たのは、栄光の主を指し示すメッセージによってであり、そのメッセージによって栄光の主を仰ぎ見る礼拝によってでした。私たちの礼拝もかくありたいと思います。教会のメッセージが、栄光の主を指し示すものになるように、それによって私たちが栄光の主に目を向け、主をあがめるものとなるように、礼拝がキリストの栄光をもっともっと輝かせるものになるようにと祈りましょう。その時、教会は、キリストの栄光をこの世に指し示す「金の燭台」となることができるのです。

二、愛の主

黙示録に描かれているイエス・キリストの第二の姿は「愛の主」です。キリストは王の王、主の主であって、あらゆるものに、命令を与えることのできるお方です。たとえ、私たちが主のことばに従ったからといって、それは私たちの功績にはなりません。「自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい」（ルカ17・10）と、主が教えられた通りです。主のために何かができたとしても、「それは私がやりました」と言って大きな顔ができるものではありません。主が助けてくださらなければ私たちは何一つ成し遂げることができなかったし、主の恵みなしには何もできないからです。そうであるのに、主は、私たちのしたことを愛をもって褒めてくださるのです。

「試し読み」はここまでです。

お気に入りましたら

ご注文ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net